

「司教誕生」

主任司祭 晴佐久昌英

教皇ヨハネ・パウロ二世は、東京教区の補佐司教として東京教区の幸田和生神父を任命し、このたび司教叙階式が行われた。

幸田神父はかつて高円寺教会で三年間助任司祭を勤めており、新司教の誕生は高円寺教会にとっても、大きな喜び、励ましとなった。

司教叙階式に参列して最も強く感じたのは、「教会」ということである。少していねいに言うならば、神が二千年前にお始めになった「教会という出来事」が、いまなおその本質において何一つ欠けることなく、生き生きと実在していることを実感した、ということである。

教会は、この世の組織でも建物でもない。それはかつて実際に起こり、今なお起こり続けている偉大な「出来事」である。ただ、それはあまりにも身近でありながらあまりにも壮大で、「永遠」でありながら「今日」であったりするので、全体を感じ取ることが難しい。そんな神秘的な「教会という出来事」を、司教叙階式はまさに「ひと目で」見せてくれたのだった。

一人の人が司教になるということは、神が人類を愛し、人類にかかわり、人類を救おうとしていること、そのものである。もちろんそれはすべてあのイエスにおいて起こったことではあるが、そのイエスの「今日」がすべての人の「今日」となるために、「今日のイエス」が召されて、選ばれ、聖別されて人々の前に立つ。それが教会という出来事であり、あの日、われわれの目の前で祭壇に立ったのは、紛れもなくイエスその人だった。それが信じられないようなら、もはや「教会」など、存在しない。

叙階式の中心部分で、大司教は受階者に按手して、天の父にこう祈る。
「この選ばれた者の上にあなたからの力、聖霊を注いでください。あなたが御子イエス・キリストにお与えになった霊。キリストが使徒たちにお授けになった霊。使徒たちはこの霊に満たされて、絶えることのない賛美のために各地にあなたの聖なる場所として教会を立てました」

幸田司教の上に聖霊が注がれた瞬間、「各地の聖なる場所」である東京教区の民は、使徒たちとともに聖霊降臨を体験したのである。